

[最優秀賞]

## 「祖母と私の北方領土」

北海道教育大学附属札幌中学校

2年 二階堂 萌子

時折、テレビで北方領土へのビザなし交流や墓参の報道を目にします。ご高齢になった元島民の方々がかつて暮らしていた国後島や択捉島を訪れた様子が報道されています。

北海道に住んでいる私たちは、北方領土への墓参や、返還運動の集会を報道で知ることができますが、全国的にはどうでしょう。新聞の記事になっているのでしょうか。北方四島への関心が一部に限られていないのでしょうか。

私の祖母は8歳まで、国後島のチカップナイ（近布内）という所に住んでいたそうです。1945年8月のある日、数隻のロシアの船が沖を通り、フルカマップ（古釜布）の湾へ入っていく姿を見たと言います。その日からロシア兵は国後島を支配していったのです。豊かな自然と資源の恩恵を受けて暮らしていた故郷と、鉛色に見えた船のことは忘れられないと言っていました。故郷を追われてから、祖母がその地へ帰ることはありませんでした。

北海道のホームページによると、北方領土を訪れるためには、四島交流事業、自由訪問事業、北方墓参事業の3つの方法があるようです。いずれも資格条件がありますが、ロシアのビザを取得することなく訪問できます。ロシアのビザを取得し上陸することは、「北方領土は我が国固有の領土である」という日本政府の立場と相いれないため、上記3つ以外の訪問は自粛が求められています。

元島民である祖母も訪問を望むなら条件を満たしているため訪問できるのに、これまで一度もそのような話をしたことがありません。この機会に聞いてみると、ロシアの街へと変わってしまった様子を見るより、懐かしい思い出のままでいたいと、予期せぬ答えが返ってきました。70年余の月日は、町も元島民の心さえも変えてしまったのです。

祖母の思う北方領土、そして現在を生きる私の知る北方領土には大きな開きがあります。私には、地図で見る国境の島でしかなく、その過去も現在の姿も想像できません。元島民の方の語りがいつの日か消えてしまったら、北方領土返還の問題は、ますます解決から遠くなってしまうのではないのでしょうか。

北方領土返還のためには、これから先もこの問題に関心を寄せる人が多く出てくる必要があると思います。そのためには、テレビやインターネットで交流事業の様子だけでなく、今の北方領土に住む人々の生活ももっと報道してもらいたいと思います。

そして、四島訪問の条件を元島民やその子孫、研究者、返還運動を行っている人に限ることを止め、関心のある全国の人達に拡大して行ってほしいと思うのです。訪問できるとなれば関心を寄せる人も増え、領土返還運動を風化させまいという世論の高まりにつながっていくのではないのでしょうか。

祖母の臉に焼き付いた国後島の風景を、私は想像していきます。領土問題に関する本を読んだり、元島民の方へお話を聞き、これからも私の心の中から消えないように守っていきたいと思います。